「森の芸術祭　晴れの国・岡山」2027

Forest Festival of the Arts Okayama:

Clear-skies Country 2027

実施計画

「森の芸術祭　晴れの国・岡山」実行委員会

令和８年１０月２２日

目次

１　開催趣旨 3
２　コンセプト 4
３　開催概要 5
（１）名称 5
（２）会期 5
（３）開催エリア 5
（４）アート作品設置市町村 5
（５）主催 5
（６）アートディレクター 7
（７）ロゴマーク 8
４　構成 9
５　アート作品設置会場及び参加アーティスト等 10
（１）概要 10
（２）各エリアの特色とアート作品設置会場 11
（３）参加アーティスト 23
６　広報 43
（１）方針 43
（２）取組内容 43
７　受入環境の整備・来場者への対応 45
（１）方針 45
（２）取組内容 45
８　観光・文化振興 47
（１）方針 47
（２）取組内容 47
９　地域交流・学校連携 48
（１）方針 48
（２）取組内容 48
１０　サポートスタッフ 49
（１）方針 49
（２）取組内容 49
１１　鑑賞券・オフィシャルグッズの展開 51
（１）方針 51
（２）取組内容 51

１２　企業協力・協賛 52
（１）方針 52
（２）取組内容 52
１３　スケジュール概要 53

1　開催趣旨

岡山県北部には、中国山地の雄大な自然、旧街道の宿場町や城下町として栄えた歴史ある街並み、古くから受け継がれた伝統芸能、多彩な農産物など、瀬戸内海沿岸部とは異なる風景、文化、魅力的な地域資源が数多くあります。

これらの地域の魅力をこれまで以上に広く認知してもらい、「アート」という新たな切り口により地域の魅力を引き出すため、県北部の 12 市町村をエリアとする国際芸術祭として「森の芸術祭　晴れの国・岡山」を 2024 年秋、初めて開催しました。

12 の国・地域から 42 組 43 人のアーティストを迎え、5 市町（津山市、新見市、真庭市、鏡野町、奈義町）の 21 会場にアート作品を展示した初回芸術祭には、想定を大きく上回る延べ約 52 万人の方々に来場いただきました。芸術祭の開催を通じて、アートには、地域の潜在的な価値を引き出し、人々をつなぎ、活力を生み出す力があることをあらためて確信したところです。

「森の芸術祭　晴れの国・岡山」2027 は、初回芸術祭で築き上げた基盤の上に、来場者、アーティスト、そして地域の人々が一緒になって創り上げる新たな芸術祭です。多様なアート作品との出会いが、皆さまの想像力を刺激し、心揺さぶる感動や新たな気づきをもたらすことでしょう。そして、アートが地域と深く結びつくことで、その文化や暮らしに新たな光を当て、地域が未来へ向かってさらに輝くための力となることを目指します。

本芸術祭は、アート作品を核とした広域的な周遊を一層促進し、地域全体の観光消費の拡大と交流人口の増加に貢献します。地域の方々にとっては、アーティストや来場者との非日常的な触れ合いが、地域の魅力を再認識し、より一層、地域を誇りに感じる貴重な機会となるでしょう。

「森の芸術祭　晴れの国・岡山」2027 が、岡山ならでは、県北部ならではの国際芸術祭として、文化、観光、そして地域全体の持続的な発展に寄与するよう、県全体で取り組んでいきます。

２　コンセプト

プロトピア―前に進む森―

森に耳を澄ませ、その感性とチューニングすることで身のまわりの自然や文化を再発見しようとした初回の芸術祭の考えを一歩進め、今回は「前に進む森」という新しい視点を掲げます。それは、今日よりほんの少し良くなっていく明日へ向かって、ゆっくりと変化し続ける森の姿です。このイメージの背景には、ケヴィン・ケリー[1]の提唱する「プロトピア」という考えがあります。それは、理想郷（ユートピア）でも悲観的な未来（ディストピア）でもなく、日々の小さな改善の積み重ねによって、現実の中でよりよい社会を育てていこうとする視点です。

本芸術祭では、このプロトピアの思想と、社会的共通資本の考え方を重ね合わせます。それは、芸術祭を起点として、テクノロジー、農業、福祉、教育など、さまざまな分野の人々が出会い、協働する場をひらきます。そして、自然やインフラ、制度といった、私たちが共有する大切な基盤を守りながら、次の世代へとつないでゆきます。

「森の芸術祭　晴れの国・岡山」2027 は、岡山県北部を舞台に、地域に眠る資源や文化をあらためて見つめ直し、小さな実践を積み重ねていきます。それは作品をつくることにとどまらず、人と自然、文化と暮らしの関係をゆるやかに編み直していく試みでもあります。こうしたプロセスを通じて、訪れる人にも、そこに暮らす人にも、新しい視点や誇りが生まれ、地域の内側から未来へ向かう力が育まれていくことを願っています。

アートディレクター　長谷川 祐子

[1] アメリカの編集者・思想家・テクノロジー評論家。テクノロジーと社会、未来予測に関する著作で知られ、雑誌『WIRED』の創刊編集長の一人。人工知能やインターネット、分散型社会について早くから論じてきた人物として、世界的な影響力を持つ。

３　開催概要

（１）名称

「森の芸術祭　晴れの国・岡山」2027

(英語表記)

Forest Festival of the Arts Okayama: Clear-skies Country 2027

（２）会期

2027 年 9 月 18 日（土）～同 11 月 23 日（火・祝）(67 日間)

（３）開催エリア

津山市、高梁市、新見市、真庭市、美作市、新庄村、鏡野町、勝央町、奈義町、西粟倉村、久米南町、美咲町

（４）アート作品設置市町村

津山市、高梁市、新見市、真庭市、鏡野町、勝央町、奈義町

（５）主催

「森の芸術祭　晴れの国・岡山」実行委員会

会　長	伊原木隆太（岡山県知事）
副会長	石田芳生（高梁市長）
〃	萩原誠司（美作市長）
〃	林秀樹（西日本旅客鉄道（株）理事 中国統括本部岡山支社長）
顧　問	太田正孝（岡山県議会議長）
アートディレクター	長谷川祐子
ｻｲｴﾝﾃｨﾌｨｯｸｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	エマヌエーレ・コッチャ (哲学者／フランス国立社会科学高等研究院准教授)
ｱｰﾄ地域共創ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	宮田裕章（慶應義塾大学医学部教授）
地域文化アドバイザー	岸本和明（奈義町現代美術館館長） 太田三郎（現代美術作家）

構成団体　岡山県、津山市、高梁市、新見市、真庭市、美作市、新庄村、鏡野町、勝央町、奈義町、西粟倉村、久米南町、美咲町、西日本旅客鉄道（株）、（公社）岡山県観光連盟、美作国観光連盟、(公社) 岡山県文化連盟、岡山県教育委員会、大学コンソーシアム岡山、岡山県市長会、岡山県町村会、(一社) 岡山県商工会議所連合会、岡山県経営者協会、(一社) 岡山経済同友会、岡山

県中小企業団体中央会、岡山県商工会連合会、（公社）岡山県バス協会、（一社）岡山県タクシー協会、（一社）岡山県レンタカー協会、全日本空輸（株）岡山支店、日本航空（株）岡山支店、（一社）日本旅行業協会中四国支部岡山地区委員会、（一社）全国旅行業協会岡山県支部、岡山県旅館ホテル生活衛生同業組合

（６）アートディレクター

長谷川　祐子



キュレーター／近・現代美術史家／キュレーション理論／京都大学経営管理大学院客員教授／東京芸術大学名誉教授／国際文化会館アートデザイン部門プログラムデイレクター／前・金沢２１世紀美術館館長。

2006 年から 2016 年まで多摩美術大学教授、2016 年から 2023 年まで東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授を務める。

2023 年にはカ・フォスカリ大学(イタリア)、2025 年にはヴェネチア建築大学(IUAV)の客員教授を歴任。文化庁長官表彰（2020 年)、フランス芸術文化勲章シュヴァリエ（2015 年)、ブラジル文化勲章（2017 年)、フランス芸術文化勲章オフィシエ（2024 年）を受賞。

これまでイスタンブール（2001 年)、上海（2002 年)、サンパウロ（2010 年)、シャルジャ（2013 年)、モスクワ（2017 年)、タイ（2021 年）などのビエンナーレや、フランスで日本文化を紹介する「ジャパノラマ：日本の現代アートの新しいヴィジョン」、「ジャポニスム 2018：深みへ―日本の美意識を求めて―」展、直近では 2026 年のイタリア（ヴェネチア・ビエンナーレ）におけるシリア・パビリオンなど、数々の国際展を企画。

主な著書に、『キュレーション知と感性を揺さぶる力』(集英社)、『破壊しに、と彼女たちは言う：柔らかに境界を横断する女性アーティストたち』（東京藝術大学出版会)、『ジャパノラマ ：1970 年以降の日本の現代アート』

（水声社）、『新しいエコロジーとアート「まごつき期」としての人新世』（以文社）。

（７）ロゴマーク









デザインコンセプト

芸術祭のビジュアル・アイデンティティは、光と影の二面性から着想を得ています。そして、新鮮で現代的な色彩を用いたメッシュ状のデザインは、地元の工房で作られた繊細な草木染の織物から着想を得ており、デザインに明るさと透明感を生み出しています。また、県北の自然を撮影した写真と組み合わせることで、芸術祭と景観との共生を表現することができます。

デザイナープロフィール：バーンブルック・スタジオ（イギリス）

バーンブルック・スタジオは、1990 年にジョナサン・バーンブルックによって設立されました。デザインは社会にポジティブな変化をもたらすことができると信じ、世界各地でさまざまな文化的、社会的プロジェクトに取り組んでいます。代表的な作品に、デヴィッド・ボウイのレコードジャケットがあり、彼の最後のアルバム「ブラックスター」では、グラミー賞を受賞しています。また、日本との関係も深く、東京の森美術館や六本木ヒルズのブランディングを手がけています。

４　構成

芸術祭は、アートを核として、観光振興と文化振興の２本の柱から構成し、県北部はもとより県全体の持続的な地域振興を図ります。

アーティストとの交流や多くの観光客が地域を訪れることにより、地域住民が今まで気づかなかった地域の魅力を再認識し、地域を愛する心や誇り、いわゆるシビックプライドの醸成につなげるとともに、開催にあたっては、地域づくりに関わる人々をはじめ、多様な主体とも積極的に連携し、地域の活力向上を図ります。

＜観光振興＞

現状の課題として、本県を訪れる観光客は交通網の充実した県南部に集中していることが挙げられます。一方で初回芸術祭では、県北部の豊かな自然や歴史ある地域資源とアートを融合させることで、県北部へ新たな誘客効果を創出しました。

そこで、この成功をさらに発展させ、アート作品を核とした広域的な周遊を促進し、より質の高い滞在体験を提供することで、観光誘客を強化します。

これにより、県北部のみならず県全体の観光消費拡大及び交流人口増加につなげることを目指します。

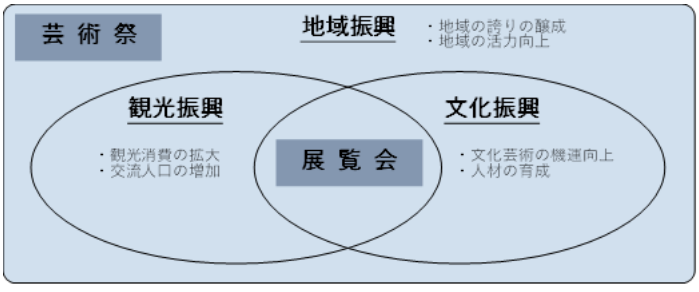
＜文化振興＞

県北部では、美術館等での意欲的な企画展の開催や、アーティスト・イン・レジデンス、美作三湯芸術温度をはじめとするアートイベントなどの多彩な取組により、積極的に地域にアートを取り入れる素地ができています。

こうした中、初回芸術祭の開催を契機として、県民のアートに対する関心は高まっており、地域づくりに文化芸術活動を生かす動きも見られます。

今後は、国内外の多様なアーティストによる質の高い作品鑑賞の機会を提供するだけでなく、地域住民がアートに「参加」する機会を積極的に創出します。

これにより、文化芸術活動の裾野の拡大や、アートによる地域活性化に取り組む人材の育成を促進します。



５　アート作品設置会場及び参加アーティスト等

（１）概要

初回芸術祭同様、国内外から幅広い分野で活躍するアーティストを迎え、今回新たに設定されたコンセプト「プロトピア―前に進む森―」のもと、前回作品を設置した５市町（津山市、新見市、真庭市、鏡野町、奈義町）に高梁市、勝央町を加えた７市町において、作品展示やパフォーマンスなど地域の特性を生かしたユニークなプロジェクトを展開します。

（２）各エリアの特色とアート作品設置会場

津山市

特色

津山市は、中国山地に囲まれた津山盆地に位置し、豊かな自然と歴史・文化が重なり合う岡山県北部の中心都市です。

江戸時代には津山城（鶴山公園）を中心に、東西に城下町が栄え、旧出雲街道を通じて人や物、文化が行き交いました。現在も当時の町割りや木造建築、さらに明治・大正期に建築された欧風建築が立ち並び、往時の繁栄と重層的な歴史を感じることができます。

また、江戸時代後期から洋学が盛んで、多くの洋学者を輩出し、近代医学の発展に貢献した地でもあります。全国でも希少な洋学専門の資料館である「津山洋学資料館」や山陰と山陽を結ぶ交通の要衝として、1936 年に建設された「旧津山扇形機関車庫(現・津山まなびの鉄道館)」をはじめとし、津山市の歴史や文化を伝える多様な建造物や資産が保存され、様々な形で活用されています。

食文化では、豊かな自然の中で育まれた牛肉食文化が受け継がれており、「津山の牛肉料理」は文化庁の「伝統の 100 年フード」にも認定されています。

会場

津山城下町・鉄道エリア



作州民芸館　撮影：浅野豪



城西浪漫館　撮影：浅野豪



撮影：浅野豪

津山まなびの鉄道館



撮影：浅野豪

つやま自然のふしぎ館



津山洋学資料館　撮影：浅野豪



PORT ART & DESIGN TSUYAMA

グリーンヒルズ津山エリア



撮影：浅野豪

グリーンヒルズ津山



撮影：浅野豪

グリーンヒルズ津山リージョンセンター

奈義町

特色

奈義町は、中国山地の秀峰「那岐山」の南麓に位置し、四季折々に表情を変える雄大な山の姿を眺めることができます。また、移住・子育て支援の充実に取り組み、合計特殊出生率の高さでも全国的に注目を集め、少子化対策で「奇跡の町」と称されています。

世界的な建築家である磯崎新氏が設計した「奈義町現代美術館」は、作品と建物が半永久的に一体化した公共建築では世界で初めての体感型美術館です。また、江戸時代から受け継がれてきた伝統芸能「横仙歌舞伎」は、年２回の定期公演を中心に、地域の人々によって大切に守り伝えられています。

豊かな自然の中で、現代美術と伝統芸能が共存する奈義町では、地域で文化・芸術を大切に育みながら、暮らしの中でアートに触れることのできる環境が形づくられています。

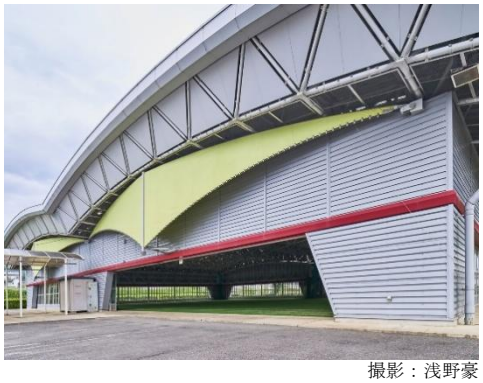
会場

奈義エリア



撮影：浅野豪

奈義町現代美術館



撮影：浅野豪

屋内ゲートボール場「すぱーく奈義」

高梁市

特色

高梁市は、一級河川高梁川が中央部を南北に貫流しており、古くから城下町として発展を遂げてきました。今もなお、寺町周辺の神社仏閣や石火矢町の武家屋敷など情緒豊かな町並みが残されており、当時の面影をしのぶことができます。

特に、標高 430m の臥牛山頂上付近に建つ備中松山城は、天守が現存する日本で唯一の山城であり、９月下旬から４月初旬には、雲海に包まれることから「天空の山城」として広く親しまれています。

また、建築家・安藤忠雄氏が手掛けた成羽美術館では、コンクリートの壁と周囲の緑が調和した､美しい景観を背景に、近現代美術、オリエント古美術、化石など、時空を超えた展示をお楽しみいただけます。

さらに、色鮮やかな赤い町並みが特徴的な吹屋地区は、かつて国内屈指の銅と弁柄の産地として栄えました。多くの伝統工芸品を彩る弁柄の赤色は、「ジャパンレッド」として海外でも高く評価されており、吹屋地区はその発祥の地として日本遺産に認定されています。

会場

高梁・成羽エリア



撮影：浅野豪

頼久寺



撮影：浅野豪

高梁市成羽美術館

吹屋エリア



吹屋ふるさと村

新見市

特色

新見市は、岡山県の北西端部、一級河川高梁川の源流に位置し、清らかな水と自然豊かな地域であり、市内の南東部にはカルスト台地が広がっています。「満奇洞」や「井倉洞」などの神秘的な鍾乳洞や、大自然を満喫できる観光やアウトドアスポットがあります。

中心部には、幅広い年齢層の人々が芸術に触れることのできる「新見美術館」や、人々がいきいきと集い、楽しい出会いや発見が生まれる拠点として親しまれている「新見文化交流館（まなび広場にいみ）」など文化交流拠点が充実しています。

食文化においては、優れた和牛の系統の中でも最も古く、和牛のルーツともいわれる「千屋牛」をはじめ、カルスト地域特有の風土や清らかな水を生かして育まれたピオーネや、白桃、ワイン、キャビアなど、上質で多彩な特産品に恵まれています。

会場

満奇洞・井倉洞エリア



©岡山県観光連盟

満奇洞



撮影：浅野豪

井倉洞

新見美術館周辺エリア



撮影：浅野豪

新見美術館



撮影：浅野豪

まなび広場にいみ（ふれあい広場）

真庭市

特色

真庭市は、岡山県北部、中国山地のほぼ中央に位置しています。北部の蒜山地域には、なだらかな高原と広大な牧草地が広がり、全国有数のジャージー牛の飼育地として知られています。また、隈研吾氏が設計したシンボル施設「風の葉」を有する「GREENable HIRUZEN」では、ミュージアムでの鑑賞や多彩なアクティビティを楽しむことができます。

一方、中南部には、良質な泉質で知られる湯原温泉や、のれんが彩る勝山町並み保存地区があります。また、良質なスギ・ヒノキを産出し、多くの伐採事業者や木材加工事業者が集積しています。豊富な森林資源を生かした木質バイオマス産業も発展しています。

さらに、南部の北房地域は、カルスト地形や鍾乳洞、ホタルの生息地として知られています。古墳をはじめとする歴史文化資源にも恵まれ、豊かな自然と歴史・文化が共存する地域となっています。

会場

蒜山エリア



©真庭観光局

GREENable HIRUZEN



撮影：浅野豪

シェアオフィス蒜山ひととき

勝山・北房エリア



撮影：浅野豪

備中鐘乳穴

鏡野町

特色

鏡野町は、中国山地を背景とした森林資源の豊かな自然環境に恵まれた地域です。

吉井川上流に位置する奥津渓は、約３ｋｍにわたって続く渓谷で、透明度が高く美しい水が流れ、秋は紅葉の絶景が広がり、素晴らしい渓谷美を眺めることができます。また、奥津橋のたもとで行われる「足踏み洗濯」は奥津温泉のシンボル的光景となっています。

奥津湖は、苫田ダムの建設によって誕生した人造湖です。旧奥津町に建設されたことなどから「奥津湖」と命名されました。湖畔には広場が整備され、そよ風を感じながら気軽に散策ができるほか、カヤックやＳＵＰなどのアクティビティを楽しむことができます。

会場

奥津エリア



みずの郷奥津湖

勝央町

特色

勝央町は、岡山県の北東部に位置し、古くから出雲街道の宿場町として栄えた歴史と心安らぐ田園風景が広がる地域です。

童話「金太郎」として知られる坂田金時終焉の地という伝説が息づく伝統・文化と、県内屈指の規模を誇る「勝央工業団地」を基盤とした新しい産業の活力が融合した、活力ある田園工業都市としての側面を併せ持っています。またこの地では、郷土ゆかりの文化として、なぎなた等の武道が世代を超えて育まれてきました。

美しい自然環境を舞台にした体験型の交流はこの町の大きな魅力となっており、広大な農村景観を活かした四季折々の体験に、来訪者は心を惹きつけられ、温かな触れ合いを楽しむことができます。

会場

勝央エリア



撮影：浅野豪

おかやまファーマーズ・マーケット
ノースヴィレッジ

（３）参加アーティスト

（姓のアルファベット順）

ファイグ・アフメッド

Faig Ahmed



Faig Ahmed, *Nizami Ganjavi*, 2021.

Courtesy of Faig Ahmed Studio

1982 年スムガイト（アゼルバイジャン）生まれ。現在はバクー（アゼルバイジャン）を拠点に活動。

ファイグ・アフメッドはバクー在住の現代美術作家。アゼルバイジャン国立美術アカデミーで彫刻を学ぶ。アゼルバイジャンの伝統的な絨毯作りが内包する文化的・物質的・知覚的なシステムを再考するその制作は、国際的に高い評価を受けている。

アフメッドは、歴史豊かなアゼルバイジャンの絨毯の視覚言語と技術を、彫刻的、空間的、そしてコンセプチュアルなアート作品へと変容させた作品で知られている。アフメッドは、絨毯を固定的な文化財としてではなく、解体し、拡張し、意味を転換し、現代的な視覚文化との対話の中に位置付けることができるような情報システムとして捉えている。絨毯本来のパターンや構造、スケール、素材を改変することにより、伝統と変質、現実空間と仮想空間、集団的記憶と個人の認知など、さまざまな関係性を検証する。

近年のアフメッドの制作は、媒体としての絨毯から、意識や認知、神経科学、確率論、エマージングテクノロジーなどに関わる領域横断的な研究へと拡張している。パターン認知や意味の構築、文化や技術のシステムによる人類の体験の形成などを探究するその作品は、テキスタイル、彫刻、インスタレーション、映像、音響、そして研究ベースの形態まで、多様な形式で展開している。こうした展開により、その作品においては、幾何学や神秘主義、カリグラフィー、サイエンス、古文書、知識システムなどに対する彼自身の長年にわたる関心がさらに大きく拡大している。

アフメッドは、2007 年のヴェネチア・ビエンナーレにてアゼルバイジャンが初めて出展した国別パビリオンでの展示に参加。2026 年のヴェネチア・ビエンナーレではアゼルバイジャンのパビリオンで個展「The Attention」を開催した。また、プリンストン美術館、アガ・カーン美術館、ローマ現代美術館（MACRO）、ジョージ・ワシントン大学博物館およびテキスタイル博物館、ホノルル美術館、サンルイスオビスポ美術館、マラヤ・アートセンター、フランクフルト応用工芸博物館、イスタンブール近代美術館、MONA タスマニア、シドニー応用芸術科学博物館など、世界各地で展示を行っている。2013 年にはヴィクトリア・アンド・アルバート美術館で開催された「第３回ジャミール賞」にノミネートされた。

スミッタ・M・バブ

Smitha M Babu



Smitha M Babu, *Pakkalam*, 2023-

Photo by A.J. Joji at the Kochi-Muziris Biennale

1981 年ケララ州（インド）生まれ。ケララ州（インド）を拠点に活動。

スミッタ・M・バブは現代美術作家、舞台芸術家、パフォーマンスアーティスト、俳優。ティルバナンタプーラム美術大学で芸術学（絵画）の学士号を取得。記憶や生態系、そして自らを取り巻く文化的・歴史的風景を主な題材として作品制作を行っている。

第 63 回全国美術展（2023 年）、クランティ・アート 2023（バングラデシュ・インド・アート・エクスチェンジ）、コチ・ムジリス・ビエンナーレ（2025〜26 年）をはじめ、インド国内外の主要な施設や機関での展示に参加。2021 年には「ケララ・ラリタカラ・アカデミー美術賞」を受賞。主な個展に、「Sketches in Motion」（コッラム公立図書館、コッラム、2003 年）、「Paakkalam」（Durbar Hall Art Gallery、コチ／ケララ・ライタカラ・アカデミー、トリッシュール、いずれも 2024 年）、「Choreography in Deep Green」（Vadehra Art Gallery、ニューデリー、2026 年）などがある。

美術作品の制作と並行して、バブは演劇やパフォーマンスアートにも深く関わり、活動を展開。ケララ州国際演劇祭（ITFOK）やインド国立演劇学校フェスティバルなど、権威ある演劇祭で舞台に立っている。単独パフォーマンス作品「Paakkalam」（2023 年）や、コチ・ムジリス・ビエンナーレにおけるパフォーマンス、そしてその独創的な視覚芸術言語を通じて、バブはインドの現代美術と演劇に対して意義ある貢献をもたらすべく取り組みを継続している。

ジュリアン・シャリエール

Julian Charrière



Julian Charrière, *Towards No Earthly Pole,* 2019

© The Artist / VG Bild-Kunst, Bonn 2026

1987 年、スイス生まれ。ベルリン（ドイツ）を拠点に活動。

フランス系スイス人アーティストのジュリアン・シャリエールは自然の地形と想像上の風景を題材に、文化史や、悠久の時間軸で地球という惑星を形成してきた地質学的な力、そしてそれに対する人類の思考を探究する作品を制作している。

シャリエールの制作は、映像、彫刻、写真、インスタレーションと多岐にわたり、融解する氷河や核実験場、深海の生態系、鉱山など、隔絶した土地でありながら人為的な推論が強く介入している場所のフィールドワークを基盤としている。科学的な観察眼とスペキュラティブ・ポエティクス（思索的詩学）を取り入れた方法論を用いてシャリエールが構築する没入的な空間は、驚異と不穏に満ちあふれ、「探検」という行為につきまとう植民地主義的かつ資源収奪主義的なレガシーを脱構築するための遭遇の舞台として機能する。このレガシーは、現在も、「見ること」にまつわるテクノロジーを支配しているのだ。

シャリエールの作品は世界各国で発表されている。MONA ミュージアム・オブ・オールド・アンド・ニュー・アート（オーストラリア、タスマニア）、コッレール博物館（イタリア）、ヴォルフスブルク美術館（ドイツ）、ティンゲリー美術館（スイス）、アルケン近代美術館（デンマーク）、パレ・ド・トーキョー（フランス）、サンフランシスコ近代美術館（アメリカ）、ランゲン美術館（ドイツ）、ボローニャ近代美術館（イタリア）、アールガウ美術館（スイス）などで個展を開催。この他、ポンピドゥー・センター（フランス）、バイエラー財団（スイス）、森美術館（日本）などでも展示を行い、ヴェネチア・ビエンナーレにも複数回参加している。2024 年にはロサンゼルス現代美術館主催の「エリック・アンド・ウェンディ・シュミット環境芸術賞」の初代受賞者となった。

ジュリアナ・ドス・サントス

Juliana dos Santos



Installation view of Temporã at Pinacoteca do Estado de São Paulo, Brazil.

Photo: Erika Mayumi

Courtesy of the artist and Galeria Luisa Strina.

1987 年、サンパウロ（ブラジル）生まれ。サンパウロ（ブラジル）を拠点に活動。

ジュリアナ・ドス・サントスは色、時間、そして空間の関係性を追究しているブラジル人アーティスト。自らの制作を「継続的な協働のプロセス」として位置付けている。

ドス・サントスの作品においては、花から抽出した青い色素が感覚的・象徴的・政治的な役割を果たしている。ドス・サントスにとって、絵画は固定的なイメージではない。吹き付けや拡散、染め付けといった行為による画面の構築こそが彼女にとっての絵画であり、そこでは物質そのものが作品の形成に関与する。こうしたプロセスを通して、絵画や版画、インスタレーションやパフォーマンスの境界線が溶解し、ひとつの連続した制作行為へと変容していく。

植物性の色素の自然な酸化作用によって､絵画画面上に時間性が導入される。すなわち、時間の経過とともに作品が変化し続けていくのだ。色はうつろい、生きたプロセスとしての体験となる。絵画は完成物ではなく変化し続ける事象として位置付けられ、万物流転の思想が提示される。

ドス・サントスはサンパウロ州立大学（UNESP）芸術学部にて芸術博士号を取得。2018 年にはウィーン美術アカデミー文脈的絵画学科のレジデンス・アーティストおよび講師としてオーストリアに滞在。近年の展示としては、サンパウロ州立美術館（サンパウロ）での個展「Temporã」や、第 36 回サンパウロ・ビエンナーレ「Not All Travellers Walk Roads – Of Humanity as Practice」（2025 年）への出品などが挙げられる。

レアンドロ・エルリッヒ

Leandro Erlich



レアンドロ・エルリッヒ《まっさかさまの自然》2024

森の芸術祭 岡山

撮影：顧 剣亨

1973 年、ブエノスアイレス（アルゼンチン）生まれ。パリ（フランス）、ブエノスアイレス（アルゼンチン）、モンテビデオ（ウルグアイ）を拠点に活動。

レアンドロ・エルリッヒの作品は、過去 20 年間にわたって世界各国で展示されてきた。また、その作品は、ブエノスアイレス近代美術館（ブエノスアイレス）、テート・モダン（ロンドン）、ポンピドゥー・センター（パリ）、金沢 21 世紀美術館（金沢）、ローマ現代美術館（ローマ）、イスラエル美術館（エルサレム）などの有名美術館に収蔵されている。

エルリッヒは大規模なパブリックアートの作品を数多く手掛けてきた。ブエノスアイレスのオベリスコ（石柱記念碑）およびブエノスアイレス・ラテンアメリカ美術館（MALBA）における《シンボルの民主化》、パリで開催された国連気候変動枠組条約締約国会議（COP 21）に合わせて制作された《溶ける家》、韓国国立現代美術館（MMCA）ソウル館で展示された《反射する港》、越後妻有アートトリエンナーレ（新潟）で展示された《パランプセスト》などのプロジェクトが知られている。また、ボルドーの《La Carte, À l'ombre de la ville》は恒久設置作品となっている。

近年のプロジェクトとしては、マイアミでの《コンクリート・コーラル》や、「大阪・関西万博 2025」会場と TSURUMI こどもホスピスにおける《Infinite Garden: The Joy of Diversity》、福岡市に恒久設置された《ピクセルツリー》などが挙げられる。また、森美術館（東京）、アモス・レックス（ヘルシンキ）、ヴォルフブルク美術館（ヴォルフスブルク）、MALBA（ブエノスアイレス）、マイアミ・ペレス美術館（マイアミ）などで個展が開催されている。

コンセプチュアル・アーティストであるエルリッヒは、知覚と現実の関係性を探究し続けている。その作品は、日常的な経験とイリュージョンとの間の境界線を曖昧にさせながら、意味の構築に鑑賞者が積極的に関与することを促している。

マイク・ヒューソン

Mike Hewson



Mike Hewson, *The Key's Under the Mat*

Photo: Credit Jessica Maurer

1985 年アオテアロア（ニュージーランド）生まれ。現在はシドニー（オーストラリア）を拠点に活動。

マイク・ヒューソンはシドニーを拠点とするアーティスト。大学では構造工学と土木建築を学び、パブリックアートやインスタレーションのプロジェクトで受賞歴を持つ。その制作は、廃棄物の再利用における広範かつ創造性豊かなアプローチを特徴とする。ヒューソンの作品が創出する空間は明確な社会性を持ち、「作る」「集う」「遊ぶ」という共有体験を通じたコミュニティ構築の場を提供する。

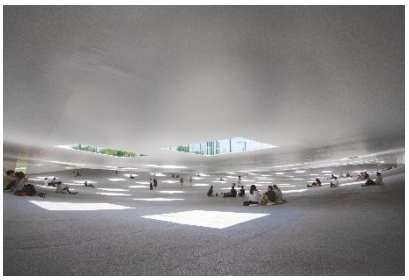
ヒューソンのパブリックアートのプロジェクトとしては、《Coal Loader Palm Grove》（シドニー、ブラックワトル湾、2026 年）、《Rocks on Wheels》（メルボルン、サウスバンク、2022 年）、《Pockets Park》（シドニー、ライカート、2022 年）、《St Peters Fences》（シドニー、セント・ピーターズ、2020 年）などがある。

近年の主な個展には、「Installations」（Roslyn Oxley9 Gallery／Sydney Contemporary、シドニー、2026 年）、「The Opera House Table」（Gallery Twenty Twenty、シドニー、2026 年）、「The Key's Under the Mat」（ニューサウスウェールズ州立美術館、シドニー、2025〜26 年）、「Geopets」（Lett Thomas／Sydney Contemporary、シドニー、2025 年）、「Fountains」（Lett Thomas、タマキ・マカウラウ／オークランド、2024 年）などがある。

ヒューソンは 2007 年にカンタベリー大学（アオテアロア／ニュージーランド）にて土木工学の学士号（優等学位）を取得。2016 年にはコロンビア大学（ニューヨーク）にて芸術学（ビジュアルアーツ）の修士号を取得している。

石上　純也

Junya Ishigami



©junya.ishigami+associates

1974 年、神奈川県生まれ。東京都を拠点に活動。

東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修士課程修了後、妹島和世建築設計事務所を経て、2004 年石上純也建築設計事務所を設立。

主な作品に、神奈川工科大学 KAIT 工房・KAIT 広場、Park Groot Vijversburg ビジターセンター、水庭、2019 年サーペンタインパヴィリオン、House & Restaurant、水の美術館など。

2009 年日本建築学会賞（作品）、2010 年第 12 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞、毎日デザイン賞、2019 年芸術選奨文部科学大臣新人賞（美術部門）、OBEL Award、2024 年フレデリック・キースラー建築芸術賞、2024 年日本建築学会賞（作品）、2025 年アメリカ建築家協会名誉会員選出、2026 年 Arnold W. Brunner Memorial Prize（アーノルド・W・ブルナー記念賞）など受賞多数。

川上　和生

Kazuo Kawakami



川上和生《母と娘》2026

イラストレーター。

1959 年北海道生まれ。鎌倉を拠点に活動。

やわらかな線と温かみのある色彩を特徴とし、自然や生き物、人々の営みを、穏やかな空気感とともに描き出す。

個展、グループ展多数。現在、雑誌挿絵、単行本の装丁、絵本、広告などで活動中。絵本「ながいながい骨の旅」（文：松田素子）で 2019 年度児童福祉文化賞受賞。

近年の主な仕事に、朝日新聞連載小説『ひこばえ』（重松清）挿絵、日経ビジネス連載小説『二宮損得』（門井慶喜）挿絵、JAL 機内誌『SKYWARD』「つばさよつばさ」（浅田次郎）挿絵など。東京イラストレーターズ・ソサエティ会員。

ケイケン

Keiken



Keiken, *Spirit Systems of Soft Knowing α┘è_┬┐┬Ü*, 2024

Photo by Niclas Warius

2015 年にロンドン（英国）で結成。現在はロンドン（英国）とベルリン（ドイツ）を拠点としている。

ハナ・オオモリを中心として結成されたアーティスト・コレクティブ。「Keiken」という名称は日本語の「経験」に由来している。ストーリーテリングの具現化、共感型テクノロジー、そしてディープな世界構築を通じて、没入的世界を創造する協働的なアプローチを先駆的に展開している。Keiken は、ゲーム、映像、インスタレーション、パフォーマンスを流動的に横断し、「スペキュラティブ・フューチャー（思索的未来）」の雛形となるような体験を創出する。その作品は、鑑賞者が触知し、つながり、そして変容させることができるような、深いレベルで相互関連性を持った経験を生み出す。

Keiken は 2024 年に The Lumen Prize を、2021 年に Chanel Next Prize を受賞。現在はサマセット・ハウス（英国、ロンドン）のレジデンス・アーティストとして活動。近年の個展・グループ展としては、2025 年のバルティック現代美術センター（英国、ニューキャッスル）、PHI（カナダ、モントリオール）、マンチェスター・インターナショナル・フェスティバル（英国、マンチェスター）、ル・キューブ・ガルジュ（フランス、ガルジュ＝レ＝ゴネス）、ツェッペリン博物館（ドイツ、フリードリヒスハーフェン）、2024 年のアモス・レックス（フィンランド、ヘルシンキ）、2023 年の金沢 21 世紀美術館（日本、金沢）、KANAL・ポンピドゥー・センター（ベルギー、ブリュッセル）、ヘルシンキ・ビエンナーレ（フィンランド、ヘルシンキ）、HAU（ドイツ、ベルリン）、2022 年の C/O ベルリン（ドイツ、ベルリン）、ウェルカム・コレクション（英国、ロンドン）、アルコ美術館（韓国、ソウル）、ユリア・シュトーシェック・コレクション（ドイツ、デュッセルドルフ）、オナシス文化センター（ギリシャ、アテネ）、2021 年のタイランド・ビエンナーレ（タイ、コラート）、HEK（スイス、バーゼル）、第 17 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展（イタリア、ヴェネチア）、東京都写真美術館（日本、東京）、2020 年の FACT（英国、リバプール）、トランスメディアーレ（世界文化の家、ドイツ、ベルリン）、2019 年の ICA（英国、ロンドン）、ジャーウッド・アーツ（英国、ロンドン）などがある。

森山　未來

Mirai　Moriyama



森山未來《さんぶたろう祭り》2024

森の芸術祭　岡山

撮影：井上嘉和

1984 年、兵庫県生まれ。東京都、兵庫県を拠点に活動。

5 歳から様々なジャンルのダンスを学び、15 歳で本格的に舞台デビュー。2013 年に文化庁文化交流使として、イスラエルに 1 年間滞在、Inbal Pinto&Avshalom Pollak Dance Company を拠点にヨーロッパ諸国にて活動。「関係値から立ち上がる身体的表現」を求めて、領域横断的に国内外で活動を展開している。

俳優として、これまでに日本の映画賞を多数受賞。ダンサーとして、第 10 回日本ダンスフォーラム賞受賞。東京 2020 オリンピック開会式ではオープニングソロパフォーマンスを担当。2022 年 4 月より神戸市に Artist in Residence KOBE（AiRK）を設立し、運営に携わる。ポスト舞踏派。

近年の活動として、パフォーマンス「Live in Progress」(2025 原摩利彦との共作)、「STILL LIFE」(2024-26 共同振付、出演)、きゅうかくうしお「素晴らしい偶然をむすんで」(2025 瀬戸内国際芸術祭、企画構成・出演)、舞台「チ。ー地球の運動についてー」(2025 アーティスティックコラボレーター、出演)、アートプロジェクト「MOTOKOLOGY」(2025 ディレクター)、アートフェスティバル「MEET YOUR ART FESTIVAL」(2026 アーティスティックディレクター) など。

リチャード・ムゼルワ

Richard Mwizerwa



Richard Mwizerwa, *Midday,* 2024

Richard Mwizerwa / space Un

1995 年、ルワンダ生まれ。キガリ（ルワンダ）を拠点に活動。

現代美術家リチャード・ムゼルワの実践は、綿密な観察、記憶、そして自然や人間の経験を形づくるゆるやかな変容に根ざしている。幼少期から、庭や地面といった身近な空間において、時間の中で静かに起こる変化の微細なディテールに対する感受性を育んできた。

抽象表現を通して、リチャードは自然を直接的な主題としてではなく、視覚的な言語として用いる。重層的な構成、質感、抑制された色彩の移ろいを通じて、時間や感情、そして日々の選択が内なるエネルギーや存在のあり方にどのように影響を与えるのかを探求している。各作品は徐々に展開され、蓄積や記憶、そして表面下で働く見えない力を映し出す。

彼の作品は、鑑賞者に立ち止まり、注意深く見ることを促し、内省と個人的な解釈のための空間を生み出す。その実践は、可視と不可視を架橋し、自然の循環と私たちが内に抱える感情の風景とのあいだに響き合いをもたらしている。

蜷川実花 with EiM

Mika Ninagawa with EiM



蜷川実花 with EiM「プロトピア行き列車」2026-

撮影：浅野豪

1972 年、東京都生まれ。東京都を拠点に活動。

写真家、映画監督、現代美術家。

写真を中心として、映画、映像、空間表現も多く手掛ける。

木村伊兵衛写真賞ほか数々受賞。2010 年ニューヨークの Rizzoli から写真集を出版。映画監督としてこれまでに『ヘルタースケルター』(2012 年)、『Diner ダイナー』(2019 年) など 5 本の長編映画、および Netflix オリジナルドラマ『FOLLOWERS』(2020 年) を監督。近年は蜷川実花 with EiM として、クリエイティブチーム「EiM (エイム)」とともに大規模なインスタレーションを手掛けるなど、表現の幅を広げている。

これまでに写真集 120 冊以上を刊行、個展 150 回以上、グループ展 130 回以上と国内外で精力的に作品発表を続ける。京都市京セラ美術館で開催された個展「蜷川実花展 with EiM：彼岸の光、此岸の影」(2025 年 1 月〜3 月) では、25 万人を動員した。最新の写真集に『VIRA』(bookshop M Co., Ltd.、2026 年)、『mirror, mirror, mirror』(光村推古書院、2026 年) がある。

主な展覧会に、グループ展「I'M SO HAPPY YOU ARE HERE」Palais de l'Archevêché (2024 年)、グループ展「Tokyo ： Art & Photography」アシュモレアン博物館 (2021 年 - 2022 年)、「MIKA NINAGAWA INTO FICTION / REALITY」北京時代美術館 (2022 年)、「蜷川実花展」台北当代芸術館 (MOCA Taipei) (2016 年)。

EiM (エイム) [Eternity in a Moment]

科学者・アーティスティックディレクターの宮田裕章、プロダクションデザイナーの ENZO、クリエイティブディレクターの桑名功、照明監督の上野甲子朗らで結成されたクリエイティブチーム。プロジェクトごとに多様なチームを編成しながら活動する。

主な作品発表に、「胡蝶の旅 Embracing Lights」安比 Art Project (2022 年)、蜷川実花「残照 / Eternity in a Moment」小山登美夫ギャラリー 前橋 (2023 年)、「蜷川実花展 Eternity in a Moment 瞬きの中の永遠」TOKYO NODE (2023-2024 年)、「蜷川実花展 with EiM：儚くも煌めく境界」弘前れんが倉庫美術館 (2024 年)、「深淵に宿る彼岸の夢」森の芸術祭 晴れの国・岡山、満奇洞 (2024 年)、「蜷川実花展 with EiM：彼岸の光、此岸の影」京都市京セラ美術館 (2025 年 1 月－3 月)、イマーシブシアター「花宵の大茶会」北野天満宮 (2026 年) など。

ウリエル・オルロー

Uriel Orlow



Uriel Orlow, *We Have Already Lived Through Our Future - We Just Dont Remember It*, 2024,
Exhibition view Forest Futurism, MCBA Lausanne, 2024
photo: Etienne Malapert

1973 年スイス生まれ。リスボン（ポルトガル）およびロンドン（イギリス）を拠点に活動。
ウリエル・オルローはディアスポラ（離散の民）としての出自を持つアーティストである。リサーチをベースに、プロセスを重視し、しばしば他の分野の専門家やさまざまな人々との対話を通じて制作を行う。コロニアリズム（植民地主義）の痕跡や、社会正義・環境正義、怪奇現象、政治的主体としての植物などがそのプロジェクトのテーマとなっている。インスタレーション、写真、映像、ドローイング、音響、庭園など、その作品の形態は多岐にわたり、多様なイメージ領域やナラティブ様式を組み合わせ連関させる試みを展開している。
オルローは、ヴェネチア・ビエンナーレ（第 54 回および第 61 回）やマニフェスタ 9 および 12 といった大規模な国際展で個展形式の展示を行っているほか、ベルリン、ダカール、コチ、台北、シャルジャ、モスクワ、カトマンズ、グアテマラなどの国際展でも作品を発表している。また、ロンドン、パリ、ニューヨーク、リスボン、チューリヒ、シカゴ、アテネ、マドリード、カイロ、イスタンブール、メキシコシティ、北京、トロント、メルボルン、ニューデリーなどの美術館やギャラリーでも展示を行っている。
2023 年、スイス芸術大賞／メレット・オッペンハイム賞を受賞。2017 年にはシャルジャ・ビエンナーレ賞を受賞。現在、ロンドンのウェストミンスター大学およびバーゼル芸術デザイン大学で教鞭を執っている。

イザベル・シカット（TOQA）

Isabel Sicat（TOQA）



Installation view of Iike the sun, I love the sky（เส่นหาอินรันดร์）, 2025, Morning Market Room

Courtesy of the artist

1993 年、ニューヨーク（アメリカ合衆国）生まれ。マニラ（フィリピン）を拠点に活動。

イザベル・シカットはフィリピン人アーティスト、ダンサー、映像作家。ファッションデザインから実験的テキスタイル、映像、インスタレーションまで、多分野を流動的に横断しながら「日常の中の冒険のためのユニフォーム」を提案するファッションスタジオ「TOQA」のデザイナーを務めている。

TOQA は、アーティストやメーカー、地域コミュニティとのコラボレーションを通じて、私たちの居場所となりうる場所にまつわる物語を紡ぎ出し、衣服を身にまとった身体、共通の儀式、再生素材の使用を通じて、集合知を保持する環境の構築に取り組んでいる。

シカットはブラウン大学とロードアイランド・スクール・オブ・デザインの二重学位プログラムを卒業。「Forbes Asia 30 Under 30（フォーブス・アジア 30 アンダー30）」に選出。スポーツとリゾートをテーマとしたシカットの方法論は、没入的なストーリーテリングと、未使用素材と再生素材の併用を中心に据えている。植民地時代に作られた歴史的な庭園を会場とした参加型のランウェイパフォーマンスの開催や、国際大会に参加するナショナルチームのためのユニフォームの開発などにも取り組み、WWF フィリピンやエルニド・リゾーツなどの組織とのコラボレーションも行っている。シカットの作品は、ハワイ・トリエンナーレやマニラ・ビエンナーレなどの国際展や、ベラス・アルテス・アウトポストなどの美術館で展示され、『Vogue』『The Face』『Glamcult』『ArtReview Asia』『Monocle』などのメディアにも掲載されている。

最近の活動としては、2025 年のタイランド・ビエンナーレのために制作された作品「Like the Sun, I Love the Sky」（映像、ファッションコレクション、ユニフォーム製作を含む、Batik Ying（バティック・イン）や職人工房 P'Elle's とのコラボレーションのプロジェクト）や、サンダンス映画祭で審査員特別賞を受賞したラファエル・マヌエル監督の映画『フィリピニャーナ』への出演などがある。

Sputniko!

Sputniko!



Sputniko!, *Drone in Search for a Four-Leaf Clover* (2023)

Courtesy of the artist

東京都生まれ。東京都を拠点に活動。

Sputniko!（スプツニ子!）は、テクノロジーと社会、ジェンダー、身体をめぐる問いを、映像、インスタレーション、音楽、ロボティクスといった多様なメディアを横断しながら展開するアーティストである。遺伝子工学、AIといった先端テクノロジーが社会や個人にもたらす変容を、神話や物語の語り口とポップカルチャーの感性を織り交ぜながら、批評的かつ詩的に可視化してきた。

主な収蔵先に、M+（香港）、ヴィクトリア&アルバート博物館（ロンドン）、金沢21世紀美術館。主な展示に、ニューヨーク近代美術館、ポンピドゥー・センター・メッス、クーパー・ヒューイット国立デザイン博物館、東京都現代美術館などがある。

2013年から2017年までマサチューセッツ工科大学（MIT）メディアラボ助教を務め、デザイン・フィクション・グループを主宰。東京大学特任准教授、東京藝術大学美術学部デザイン科准教授を経て、現在は東京藝術大学客員教授。

鈴木　理策

Risaku Suzuki



鈴木理策《水鏡 25, WM-347》2025 年　©Risaku Suzuki, Courtesy of Taka Ishii Gallery

1963 年、和歌山県新宮市生まれ。東京都を拠点に活動。

写真家。

熊野、桜、雪、サント・ヴィクトワール山、水面等の主題を通して「見ること」についての問いを喚起する写真作品を発表し続けている。写真集に『冬と春』、『知覚の感光板』（共に赤々舎）、『Sakura』、『White』（共に edition.nord）、『Water Mirror』（Case Publishing）、『Atelier of Cézanne』（Nazraeli Press）、『Kumano』、『Piles of Time』（共に光琳社出版）など。近年の展覧会に「Japan Bodies, memories, visions」Magazzino delle idee（2026 年）、「The Roots Know More」和美術館（2026 年）、「HANA Flower」SIGMA China（2026 年）、「ジャム・セッション石橋財団コレクション×柴田敏雄×鈴木理策 写真と絵画ーセザンヌより 柴田敏雄と鈴木理策」アーティゾン美術館（2022 年）など。パブリックコレクションに東京国立近代美術館、東京都写真美術館、和歌山県立近代美術館、田辺市立美術館、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、サンフランシスコ現代美術館、ヒューストン美術館、他。

東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授。

リクリット・ティラヴァニ

Rirkrit Tiravanija



リクリット・ティラヴァニ《無題 2024 （水を求めて森を探す)》2024
森の芸術祭　岡山
撮影：顧 剣亨

1961 年、ブエノスアイレス（アルゼンチン）生まれ。ニューヨーク（アメリカ合衆国)、ベルリン（ドイツ)、チェンマイ（タイ）を拠点に活動。

タイ人アーティストのリクリット・ティラヴァニは旧来の展覧会形式を否定し、料理や食事、読書といった日常的な行為の共有を通した社会的交流を提示する活動で知られている。その作品は、芸術品の優位性を拒絶する環境を創出し、モノの利用価値や、単純な行為と共同体内の相互扶助を通じて人々を互いに結びつけることに焦点を当てるとともに、労働や技巧にまつわる既成概念の打破を試みる。現在はコロンビア大学芸術学部の教授を務め、アーティストや美術史家、キュレーターが参加するコレクティブ・プロジェクト「Utopia Station（ユートピア・ステーション)」の創設メンバーでもある。チェンマイ（タイ）近郊に拠点を置く環境教育プロジェクト「The Land Foundation（ザ・ランド・ファウンデーション)」の設立にも協力した。

アドリアン・ビシャル・ロハス

Adrián Villar Rojas



Adrián Villar Rojas, *The Language of the Enemy,* 2025
Installation view at Art Sonje Center, Seoul, South Korea, 2025
Photo by Jörg Baumann.
Courtesy the artist, Marian Goodman Gallery and kurimanzutto

1980 年アルゼンチン生まれ。現在は各地を転々とするノマド生活を送っている。

アドリアン・ビシャル・ロハスの制作は、「フォン・ノイマン的な世界の星座」として捉えることができる。それは、自己増殖と自己修復の能力を持ち、地球全体で発生、進化、そして消滅という過程をたどる生態系である。ビシャル・ロハスのプロジェクトはすべて、宇宙生物学の世界で理論化されている「自己複製宇宙機」――新たな環境に進出し、その場所の材料や条件を吸収して、自分とは異なる子孫を生成していく機械――のように、新たな現実の中に身を置き、変異し、そして拡散していく。これらの複数の世界を同時に目視することはできない。全体の地図を把握することができる人間は一人もいない。

これまで 20 年間にわたって、ビシャル・ロハスのインスタレーションはさまざまな場所に「着陸」してきた――ブエノスアイレス、ヤンジリ、カルバ、アテネ、瀬戸、上海、ソウル、ヴァレ・ドゥ・ジュー、アスペンなどに。ビシャル・ロハスの作品は常に、それぞれの場所の建築、産業、地質、気候、制度的代謝、政治状況などを吸収する。そこから出現するのは、アート作品というよりもむしろひとつの自然環境だ。土壌、湿度、温度変化、デジタルシミュレーション、虫、菌類、苔、廃棄物、協力者の人間、そして時間そのものによって構成された、自己生成する生命体なのだ。

ビシャル・ロハスのインスタレーションは移動することはない。ただ増殖するだけだ。それはその場で崩壊し、あるいは断片だけが生き残り、後に続く世界のために再利用される。そのアーカイブは散乱し、不連続で、本質的に不完全だ。制作活動の全体像は存在しているが、それはパノラマ的なものではない。分散した、互いに整合性のない現実同士が、異なるスピードで即興的な動きを見せているだけである。

近年の個展としては、アスペン美術館（アスペン、2026 年）、アートソンジェセンター（ソウル、2025 年）、ザ・タンク／ニューサウスウェールズ州立美術館（シドニー、2022 年）、ザ・バス（マイアミ、2022 年）、アムステルダム旧教会（アムステルダム、2019 年）、TANK／上海油罐芸術中心（上海、2019 年）、ロサンゼルス近代美術館ゲフィン・コンテンポラリー（ロサンゼルス、2017 年）、NEON／アテネ国立天文台（アテネ、2017 年）、ブレゲンツ美術館（ブレゲンツ、2017 年）、ニューヨーク近代美術館（ニューヨーク、2017 年）などがある。

ワルリー画のアーティストたち(サダシ・シヴヤ・マーシェなど)

Warli artists (Sadashiv Jivya Mashe and others)



ジヴヤ・ソーマ・マーシェ《村の結婚式》1994

ワルリー画（Warli painting）は、インド西部のマハーラーシュトラ州周辺に住む先住民族「ワルリー族」によって受け継がれてきた伝統的な民俗絵画である。赤茶色の壁面や布地を背景に、主に米の粉などを水や天然の接着剤で溶いた白い絵の具を用いて描かれる。

自然観に基づく基本図形（円・三角・四角）の組み合わせによって、人物や建造物が表現される一方、植物や動物たちはシンプルでありながらも種類ごとの特徴を捉え、非常に生き生きと描き分けられる。

豊穣の女神を祀る儀礼の絵から、農作業や狩り、日々の暮らしの賑やかな一瞬まで、彼らの信仰と生活が一体となった世界観がテーマである。中でも、収穫の祭りなどで人々が輪になって踊る「ターパ・ダンス」を描いた、円形や螺旋状の躍動感あふれる構図が広く知られている。

また、ワルリー画では、人物の動的な配置で「時間の経過」を表すと同時に、ひとつの画面の中で、時に現実と夢や神話の世界を並置する。彼らは、動きと空間構成により、現実と非現実、時空の隔たりを超越した独自の世界を描き出している。

ルイス・ゼルビーニ

Luiz Zerbini



Luiz Zerbini, *Os Comedores de Terra [The Earth Eaters]*

Photo: Sebastiano Di Persano

1959 年、サンパウロ（ブラジル）生まれ。リオデジャネイロ（ブラジル）を拠点に活動。

ルイス・ゼルビーニは、グローバル・サウスが抱える政治や環境の問題に対する意識と、テクスチャー、パターン、そして図像を描き出す精緻な技術とを融合させながら、探索的なアプローチで絵画制作に取り組んでいる。ゼルビーニは、植物の葉や森林、高密度の植物ネットワークを描写することにより、自然の観察結果を前面に押し出し、生態系の相互作用を絵画言語へと翻訳する。過激とも言えるゼルビーニのスタンスは、ブラジルという国が置かれた状況に根差している。ゼルビーニは、風景画から集団アイデンティティの表現に至るまで、ブラジルの美術の歴史に対して批判的な目を向ける。視覚情報をキャンバス上にダイナミックに展開するその画面構成は、鑑賞者を催眠的な没入状態へと誘う。ゼルビーニの制作は、緊張関係、共存、重層化、拡散といったいくつかの法則に基づいて実践されており、それが絵画やモノタイプの作品における関係性のシステムを形成している。

ゼルビーニの作品は、カルティエ現代美術財団（フランス、パリ）、イニョチン・インスティテュート（ブラジル、ブルマジーニョ）、サンパウロ州立美術館ピナコテカ（ブラジル、サンパウロ）、サンドレット・レ・レバウデンゴ財団（イタリア、トリノ）、サンパウロ近代美術館（MAM）（ブラジル、サンパウロ）、サンパウロ・アシス・シャトーブリアン美術館（MASP）（ブラジル、サンパウロ）、リオデジャネイロ近代美術館（MAM）（ブラジル、リオデジャネイロ）、キステフォス美術館（ノルウェー、イェヴナーケル）、イタウ文化研究所（ブラジル、サンパウロ）、コロンバス美術館ピズッティ・コレクション（米国オハイオ州コロンバス）など、世界各国の重要な美術館・機関に収蔵されている。

６　広報

（１）方針

想定を大きく上回る来場者を迎えた初回芸術祭では、芸術祭の認知度向上と地域住民の理解促進に一定の成果を得ることができました。この実績を土台として、国内外における「森の芸術祭　晴れの国・岡山」2027 の認知度をさらに高めることを目指します。

また、アート作品を核とした広域的な周遊を一層促進するため、早期からの戦略的な情報発信を展開します。アート作品や参加アーティストの魅力に加え、開催エリアが持つ雄大な自然、歴史、食文化といった優れた地域資源を総合的に発信し、国内外から幅広い層の誘客とリピーターの増加につなげます。

（２）取組内容

芸術祭の認知度向上や誘客拡大を図るため、初回芸術祭の分析を踏まえ、若年層や女性などターゲットに応じた戦略的なプロモーションを展開します。また、芸術祭のイメージを広く伝えるため、統一感のあるデザインを用いた制作物によりブランディングの浸透を図ります。

①　国内向け広報

公式ＷｅｂサイトやＳＮＳを中心に、地域の魅力、作品制作のプロセス、地域との関わりなどを段階的に発信し、会期前から来場意欲を高めます。

また、ポスター、チラシ、新聞などのオフライン広告も活用し、アート関心層に加え、地域住民や観光客など幅広い層への周知を図るとともに、県や市町村等の観光・文化施策とも連携し、地域一体となった機運醸成に取り組みます。

②　海外向け広報

多言語対応の公式Ｗｅｂサイトやチラシ等を活用し、積極的な情報発信を行います。県が実施するインバウンド施策と連携しながら、海外からの誘客促進を図ります。特に、直行便を有する台湾など、東アジアを中心にプロモーション等に取り組みます。

③　メディア等への広報

美術、旅行関係を含む幅広い分野のメディアや、旅行会社へ効果的な情報提供を行うとともに、芸術祭の開幕に合わせたメディアツアーを実施することにより、アート作品とともに県北部の魅力を周遊観光につなげます。

7　受入環境の整備・来場者への対応

（1）方針

設置会場が初回芸術祭よりもさらに広範囲に及ぶことから、周遊の際の来場者の利便性を一層向上させる必要があります。多くのアート作品と周辺の観光等を楽しんでもらえるよう、質の高い情報提供を行うことで、効率的かつスムーズな移動手段を確保するとともに、快適な滞在環境の整備を進めます。

また、サスティナビリティにも配慮し、地域との共生を図りながら、来場者の記憶に残る体験を提供することを目指します。

（2）取組内容

① 二次交通対策

広域な開催エリア内に点在するアート作品を効率よく鑑賞できるよう周遊バスを整備するほか、観光地と組み合わせた魅力的なオフィシャルツアーを企画します。

また、来場者のニーズや交通手段に併せたモデルコースを提案します。

② 案内表示やインフォメーションの充実

アート作品設置会場では、配慮が必要な方を含め全ての来場者がスムーズに移動できるよう、サインの掲出場所や設置方法を工夫します。

また、アート作品設置会場の最寄り駅など拠点となる場所にインフォメーションセンターを設置し、会場までのアクセスや作品内容の説明など来場者の利便性向上を図ります。

さらに、初回芸術祭では多くの来場者が自家用車を利用していたことから、交通情報や会場付近の駐車場など丁寧な情報提供に努めます。

③ 宿泊・滞在対策

県や市町村、観光関係団体等と連携し、来場者へ宿泊や飲食の情報を提供することで、県外居住者の来訪を促し、エリア内の周遊、滞在につなげます。

④　公式Ｗｅｂサイト・ガイドブック等の活用

芸術祭や観光地等の情報については、来場意欲を高められるよう、公式Ｗｅｂサイトやガイドブックを活用して適時適切な情報提供を行います。

８　観光・文化振興

（１）方針

市町村や観光団体、文化団体等と連携しながら、観光振興及び文化振興の両面から地域振興を図ります。

観光振興については、開催エリアの観光資源を活用し、エリア内の周遊を促進します。

文化振興については、芸術祭と連携したイベントの開催等を通じて、文化施設への誘客を図ります。

（２）取組内容

芸術祭の開催効果を最大限発揮できるよう、開催エリア内で行われる観光・文化関連イベントと連携するなど、さらなる誘客や地域の活性化につなげます。

①　観光振興

県や市町村、観光関係団体等が実施する観光イベントや観光プロモーション事業と効果的に連携するとともに、実行委員会に設置した観光部会において、エリア内での周遊促進策を検討します。

また、アート作品と併せて周辺の観光地や文化施設だけでなく、食の魅力を感じてもらえる旅行商品の造成を事業者に働きかけます。

②　文化振興

県内では、美術館などの文化施設において、企画展や地域の文化イベントなど、様々な取組が行われており、芸術祭と親和性の高いこれらの事業と連携することで、県全体の文化芸術活動の活性化と交流人口の増加を図ります。

③　連携事業

芸術祭の開催趣旨やコンセプトに沿った観光・文化イベント等と連携することで、さらなる誘客や地域活性化に相乗効果をもたらします。

９　地域交流・学校連携

（１）方針

芸術祭の開催に併せて、地域住民がアーティストや来場者などと交流できる様々な機会を生み出すことにより、地域の活性化に寄与します。

また、学校等と連携し、子どもを含む若い世代が質の高いアート作品に触れる機会を提供します。

（２）取組内容

① 地域交流

地域住民や地元企業、学校、地域づくりに携わる人々等とアーティストとの交流を促進するため、アートを活用したイベント等の実施を検討し、地域の活性化及び持続可能な地域づくりにつなげます。

また、地域住民や県内の大学等と連携を図りながら、アート作品の制作等に取り組むことで、多様な主体が参画する芸術祭の実現を目指します。

② 学校連携

学校と連携した校外学習において、子どもたちに様々なアート作品を鑑賞する場を提供することにより、次世代を担う子どもたちが豊かな感性や創造性を育む場として、芸術祭の開催効果を教育に還元します。

１０　サポートスタッフ

（１）方針

芸術祭の成功には、多くのサポートスタッフの協力が不可欠です。アート作品制作・撤去の補助や会期中の会場運営サポートに加え、来場者がエリア内の周遊を楽しめるよう、コンシェルジュとしての役割も期待されます。

関係団体と連携して、幅広い年代からサポートスタッフを募集するとともに、スタッフが自信とやりがいを持って活動できるよう、人材育成に取り組むことにより、サポートスタッフと来場者双方の満足度向上を目指します。

（２）取組内容

①　募集

地域と密接な関わりを持つ人々がサポートスタッフとして芸術祭に関わり、来場者やアーティストと交流することが、地域づくりの観点からも重要であることから、地元町内会や地元企業、学校等に対し、サポートスタッフへの積極的な参加を働きかけます。また、公式ＷｅｂサイトやＳＮＳも活用し、県外からの参加も募ります。

②　研修

サポートスタッフの活動内容は多岐にわたるため、活動内容に応じた適切な研修プログラムを作成し、研修を実施します。

会場運営のサポートや周遊観光のサポートなど多岐にわたる活動内容をカバーできるよう、適切なカリキュラムを編成し、研修を行います。

また、アート作品に関する知識や、各会場における個別事情など、活動に必要な情報を事前に共有できる体制を整えます。

さらに、サポートスタッフ自身が今後も芸術祭と地域のファンになってもらえるような取組も検討します。

③　活動

サポートスタッフは、来場者に対して、アート作品の説明、会場へのアクセス方法の案内等の会場運営のサポートや、周辺観光施設や飲食店の紹介といった周遊観光のサポートに加え、アート作品制作・撤去の補助な

ど、多岐にわたる活動を行います。

こうした経験を通じて、地元の魅力を再発見し、地域を誇りに感じる機会が醸成され、また、地域の新たなファンとなり、交流人口の増加につながるなど、持続可能な地域づくりに貢献します。

さらに、アートに触れる機会を持つことで、アートによる地域活性化に取り組む人材の育成にもつなげます。

１１　鑑賞券・オフィシャルグッズの展開

（１）方針

来場者の利便性やチケット管理の効率性を考慮した鑑賞券制度を導入します。また、ロゴマークや地域の特色を生かした魅力的なオフィシャルグッズの開発・展開を通じて、芸術祭と地域の魅力を発信します。

（２）取組内容

① 鑑賞券

アート作品を鑑賞するために必要な鑑賞券として､次の２種を販売し、プレイガイドや旅行会社等を通じて販売網を整備します。

区分	鑑賞パスポート		単館鑑賞券	
	前売	当日	既存有料施設	既存無料施設
一般	3,000 円	3,500 円	施設入場料金	800 円
大学生 専門学生	2,000 円	2,500 円		
高校生以下 障害者等	無料		無料	

注：１）鑑賞パスポートは、会期中を通じて利用可能ですが、入場は原則として１会場につき１回のみとし、当日に限り再入場が可能です。

２）単館鑑賞券（既存無料施設）は、当日券のみの販売で、原則として再入場できません。

② オフィシャルグッズ

芸術祭の魅力が伝わるよう、ロゴマークや地域の特色を生かした魅力的なオフィシャルグッズを開発し、インフォメーションセンターなどで販売します。

１２　企業協力・協賛

（１）方針

芸術祭の開催趣旨に賛同する企業の協力・協賛を得ることで、芸術祭の成功と強固なパートナーシップの構築につなげます。

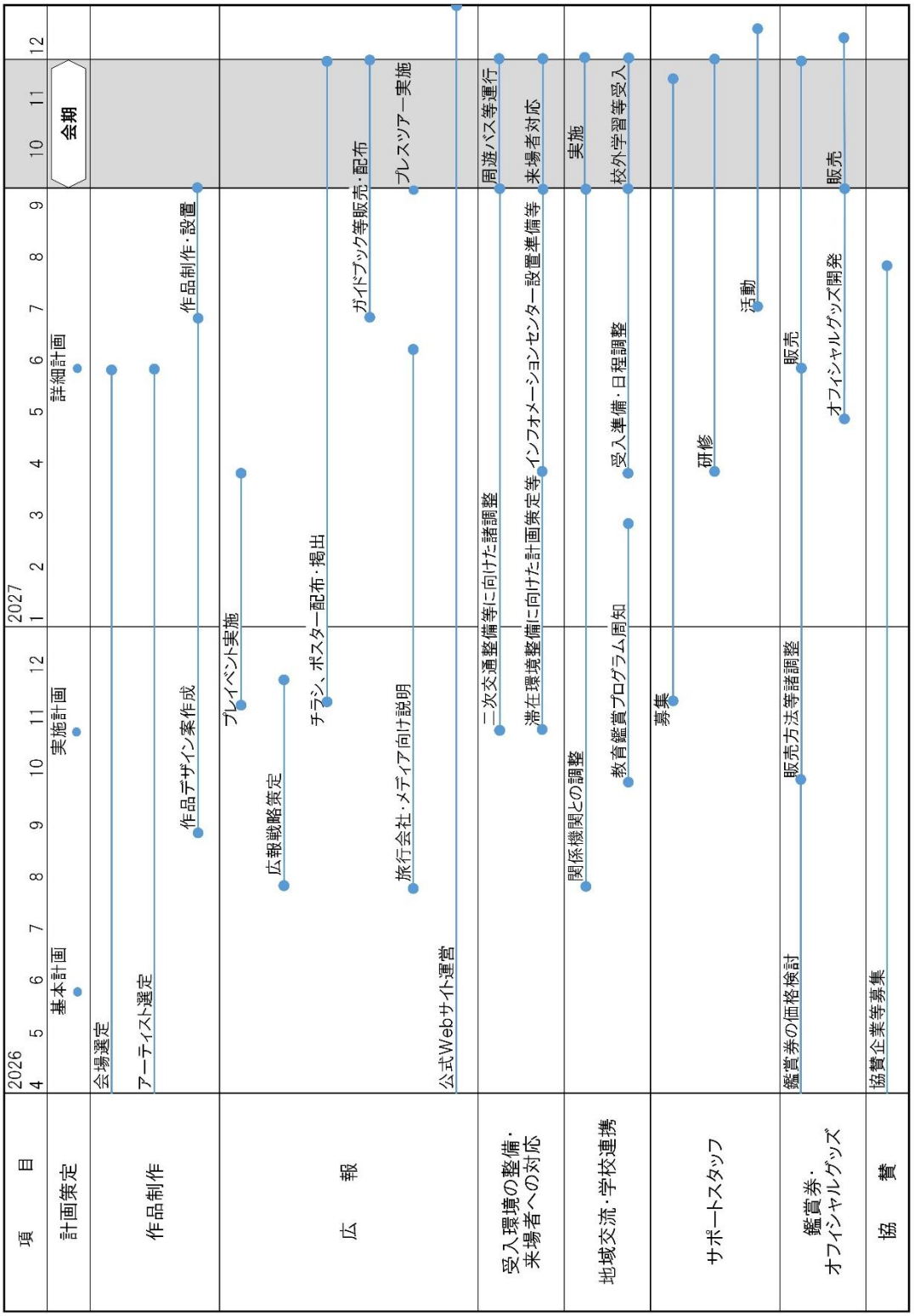
（２）取組内容

芸術祭の開催趣旨に賛同する県内外の企業に対し、積極的に協力・協賛を呼びかけ、より多くの企業とのパートナーシップ構築を目指します。

特に、社会貢献活動を積極的に推進している企業に対し、芸術祭への参画を働きかけ、企業と地域のつながりの創出を図ります。

また、各企業独自の事業分野において様々な協力を得ることで、他の芸術祭との差別化や開催趣旨の多角的な実現を図ります。

１３　スケジュール概要


項目
2026
2027
4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
会期
計画策定
基本計画
実施計画
詳細計画
作品制作
会場選定
アーティスト選定
作品デザイン案作成
作品制作・設置
広報
プレイベント実施
広報戦略策定
チラシ、ポスター配布・掲出
ガイドブック等販売・配布
旅行会社・メディア向け説明
プレスツアー実施
公式Webサイト運営
受入環境の整備・来場者への対応
二次交通整備等に向けた諸調整
周遊バス等運行
滞在環境整備に向けた計画策定等
インフォメーションセンター設置準備等
来場者対応
地域交流・学校連携
関係機関との調整
実施
教育鑑賞プログラム周知
受入準備・日程調整
校外学習等受入
サポートスタッフ
募集
研修
活動
鑑賞券・オフィシャルグッズ
鑑賞券の価格検討
販売方法等諸調整
販売
オフィシャルグッズ開発
販売
協賛
協賛企業等募集